

京都大学におけるピアサポート活動の導入とその意義

古川 裕之¹

【要約】

本稿では、京都大学におけるピアサポート活動の導入とその意義について論じた。これまで行われてきたピアサポート活動に関する研究・実践報告を概観し、ピアサポート活動は学生支援の1つの方法であるが、教育的意義も認められることを確認した。京都大学においては全学の学生相談機関がこれまでピアサポート活動を実施していなかったが、次の「コロナ禍」に備え、学生支援の方法を増やす意味でも実施することが望ましいと考えられた。また、コロナ禍を経て対面しないことが加速する現代の大学生に対して、ピアサポート活動が持つ心理学的意義について論じた。ピアサポート活動は、同じ属性を持つ学生同士による支援だが、「同じであることと違っていていることの同時性を持つ」学生による支援だからこそ他者と出会い、その他者を通して自身を知り・人格的に成長する機会をもたらすと考えられた。また、ピアサポーターの養成について論じる中で、受講者だけではなく大学全体にピアサポートマインドを涵養することの重要性と、ピアサポート活動が既存の学生支援の枠組にとらわれず、「遊ぶこと」により京都大学に新しい価値をもたらす可能性についても論じた。

【キーワード】

ピアサポート活動, 京都大学, コロナ禍, 学生支援

1 はじめに

京都大学の全学の学生相談機関としてピアサポート¹⁾活動を実施してこなかったことについては前稿(古川, 2022)で述べた通りであるが、その後様々な検討の末、学生相談部門ではピアサポート活動を導入することとした。ピアサポート活動を導入するにあたり、筆者は2023年3月に実施された「ぴあのわ2022 in 東京」(全国大学ピアサポーター合同研修会)に参加し、他大学でピアサポート活動を担当している教職員の人たちと様々に話す機会を得た。その中で尋ねられたこととして、「なぜ今、京大でピアサポート活動を始めるのか?」というものがあった。逆質問として、他大学がどのような経緯でピアサポート活動を始めたのかを尋ねると、2000年代に学生支援GPによる補助を得て開始した大学や(この辺りの経緯は松田(2021)に詳しい)、大学執行部からの要請でピアサポート活動を始めた大学など、様々な事情・理由を知ることができた。外部資金を獲得したわけでもなく、また大学執行部から要請があったわけでもないのに、あえて今このタイミングに京都大学でピアサポート活動を開始しようというのは、他大学の人たちからすれば奇異に見えたのかもしれない。様々に指摘されていることだが、ピアサポート活動を実施するには、ピアサポーターの養成と継続的な研修・ピアサポーターのモチベーション維持など、非常に多くの課題に取り組む必要がある(植田ら, 2018・鈴木, 2020など)、さらに、ピアサポート活動を実施しても、それを利用する学生が少ないと言われる中で、いかに学内に広報周知していくかという問題もある。そのような大変さが指摘されている中であえてピアサポート活動を実施する意義はあるのか、またそもそもピアサポート活動が京都大学の学生支援として有効なのかについては、筆者なりに考えてきたことであるが、本稿ではそのことに加えて、ピアサポーターの養成の持つ意味といった、ピアサポート活動の実施・導入の前段階を論じることとする。具体的

¹ 学生総合支援機構・学生相談部門・講師

なピアサポート活動の実践内容については、次年度以降に報告できればと思っている。

なお、本稿においてピアサポートとは、「学生生活上で支援（援助）を必要としている学生に対し、仲間である学生同士で気軽に相談に応じ、手助けを行う制度」という日本学生支援機構（2021）の定義を用いることとする。日本学生支援機構の調査においては、ピアサポート活動の具体的な活動内容として、「授業内での学習サポート・授業外での学習サポート・修学相談（履修相談等）・就職アドバイス・学生寮（寄宿舍）内の生活支援（レジデント・アシスタント等）・障害のある学生への支援・留学生支援・学生生活上の支援（障害学生支援・留学生支援を除く）・学生間の仲間づくり・その他」が挙げられている。京都大学においても、学生総合支援機構障害学生部門（DRC）が学生サポーターにより、各種障害のある学生に対する支援活動を行っているが、本稿で取り上げるピアサポート活動は、主に「学生生活上の支援（障害学生支援・留学生支援を除く）」と「学生間の仲間づくり」に焦点を当てたものである。また、早坂（2010）でも取り上げられている、「相談室型」の活動も念頭に置いたものとする。学習サポートとしてのピアサポート活動については現時点では考慮に入れていないが、今後の活動の展開次第では活動の中に含まれる可能性はある。

2 日本の大学におけるピアサポート活動の現状と意義

2.1 学生支援の一形態としてのピアサポート活動

日本学生支援機構の2021年度調査では、全国の大学の49.6%がピアサポート活動を実施し、国立大学においては91.9%が実施している。また、具体的な活動領域では、国立大学では留学生支援が11.0%、障害のある学生への支援が9.4%、授業外での学習サポートが8.8%、修学相談（履修相談等）が8.4%で高くなっている。鈴木（2020）は、早坂（2010）が示したピアサポート活動の分類（「相談室型」「修学支援型」「新入生支援型」）からさらにピアサポートの活動内容・活動形態のいずれでも多様な広がりを見せていると指摘している。アウトリーチ型の支援もその1つの例で、高野（2020）は、支援における個人臨床モデルとコミュニティモデルを比較し、後者のモデルに基づき、「1対1のかかわりよりもネットワークづくりを重視し、その担い手は専門家ではなく、ピア・サポーターなどの非専門家が中心」となって様々なアウトリーチ活動を行っていることを報告している。

また、学生相談学会（2014）は、「学生の自殺防止のためのガイドライン」において、「全学的な教育活動としての自殺予防」の内、①学生の自己成長を促す諸活動の1つとして、また、②支え合いの大学コミュニティづくりの1つとしてピアサポート活動を挙げており、自殺対策という意味でもピアサポート活動が大学内で果たす役割は大きいと言えるだろう。

2.2 教育としてのピアサポート活動

ピアサポーターの養成を目的として正課の授業を開講する場合のような、狭義の「教育」に限らず、ピアサポート活動を行うことは支援を受ける側だけではなく、ピアサポーター学生の人格形成・成長に寄与するという教育的意義が指摘されている（内野ら、2013・鈴木2020など）。また、その教育的な意義や効果が卒業後の社会生活にも好影響を与えていることが示唆されている（高田ら、2022）。なお、ピアサポーターとして活動する学生は、精神的健康度が高い学生ばかりではないが、金山（2023）は、学生のメンタルヘルスのスクリーニングテストである学生精神的健康調査UPI（University Personality Inventory）で得点30点以上を「要支援学生」と定義し、ピアサポーターとして登録した要支援学生が実際に活動することが、本人の成長を促進することを指摘している。そのような効果を生んだのは、ピアサポート活動が「日常の大学生活の活動とは異なり、手順、内容が構造化された活動」であり、また活動場面が「ピアサポーターのあたたか

い環境が保障されていた」ためだとしている。このことは、ピアサポート活動が、支援を受ける学生に対して一方的に支援を提供するものとしてのみ捉えられるのではなく、要支援学生を含めた全ての学生にとって成長する機会を提供しうることを示している。

3 現代の大学生とピアサポート活動

3.1 コロナ禍と大学生——京都大学にピアサポート活動を導入する意義

第2節で見たように、ピアサポート活動は学生支援としても大学教育としても効果・意義が認められる。さらに、近年生じた新型コロナウイルス感染症拡大に伴う様々な制限・制約があったコロナ禍との関連でピアサポート活動について考えてみたい。

特にコロナ禍初期の完全に大学生活がオンライン授業中心になった2020年度にしばしば指摘されたこととして、学生同士の繋がりが持てない、オンライン授業の課題が多く負担である、大学への所属意識が持ちにくいなどにより、メンタルヘルス上の問題が生じたことや、人格的な成長の機会が失われてしまったことが挙げられる。こういった問題に対して様々な対策が取られたが、その一翼を担ったのがピアサポート活動であり、日本学生支援機構（2023）は「コロナ禍における学生同士の交流に関する取組事例集【増補版】」を発行し、「ピア・サポートの活用」として8大学の具体的な取組を取り上げている。

コロナ禍の最中、京都大学においてはこういったピアサポート活動を部局単位で実施していたかもしれないが、全学の学生相談機関である学生総合支援センターカウンセリングルーム（当時）は実施しなかった。これは前稿（古川，2022）でも指摘した通り、コロナ禍以前から個別相談にリソースを割くのに手いっぱいだったことにもよる。コロナ禍を通じてカウンセリングルームでは、オンラインでの相談を継続して実施し、かつ大学が公式のアナウンスにて学生向けに様々な形でカウンセリングルームの存在を周知していたにもかかわらず、2020年度は相談件数が大きく減少した。キャンパスに行かないため相談したくともできないのか、そもそも相談機関があることを知らないのか、オンラインでの相談はハードルが高いのかなど、相談が減少した理由は多々考えられるが、コロナ禍がなければ相談に訪れていたであろう学生が、相談機関を利用せずに多くいたことは事実である。そういった潜在的には来談していた学生に対して、全学の相談機関としてピアサポート活動を実施していれば、相談機関の利用はせずとも、メンタルヘルス上のリスクを緩和できた可能性がある。また、コロナ禍に来談した学生からはしばしば、課外活動の制限が非常に厳しいことへの不満や、他の学生と関わる機会が少ないことへの不満を耳にしたが、そのような問題が生じていた時に、上記の日本学生支援機構が紹介しているようなピアサポート活動による「学生同士の交流に関する取組」を実施すれば、彼らもコロナ禍の学生生活をもう少し充実したものにできたかもしれない。

よって、同じ学生の立場で支援するピアサポート活動を全学の相談機関である学生相談部門が実施することは、いつ来るとも分からない次のコロナ禍のような困難な状況に対し、個別相談以外にも様々な支援を提供できるという意味で、今後の備えにもなるだろう。

3.2 ピアサポート活動の有効性

上記のように、コロナ禍における学生の交流を促進するような取組が日本学生支援機構により殊更に取り上げられていることが示すのは、社会が大学に対して望むこと、また当の学生が望むのは、ただ学業を修めることだけではなく、学生が他者と交流し、人間関係・コミュニケーション能力を獲得していくなどの人格的な成長を遂げることだと言える。いわゆる「廣中レポート（文部科学省，2000）」では、正課外教育を積極的に捉え直すことで、学生に知識を教授するだけではなく、「複雑化し、価値観が多様化した社会の中で

生き抜くための基本的な能力の涵養に努めていく」ことが大学には求められるとしている。そういった正課以外による学生の成長は、就職活動の際に尋ねられることの多い「ガクチカ」（学生時代頑張ったこと・力を入れたこと）の1つとして学生側も意識することである。しかし、ピアサポート活動を導入すれば、そのような人格的な成長を促すような交流が生じるのだろうか。これまでも指摘されていることだが、そもそもピアサポート活動を実施してもそれを利用する学生が少ないという指摘（日本学生支援機構，2011）からすると、ピアサポート活動が大学に与えるインパクトはそれほど大きくないかもしれない。また、筆者が学生相談で会ってきた孤立気味の京大生から得た印象は、むしろ同じ京大生と接するのは非常にハードルが高く、可能な限り接触は避けたいというものだった。そういった孤立している学生にとってコロナ禍は、他の学生の姿を目にすることがないため、他の学生と自身を比べて劣等感を強めてしまう機会が減り、悠々と自身の好きなことを楽しむ時間を持てたことで、かえってストレス低く過ごせた場合もあった。そのような学生に対して、ピアサポート活動の意義をどれだけ説明し、利用することを勧めても響くものはなかったのではないだろうか。

また、上記のような筆者が会ってきた孤立学生ではなくとも、見ず知らずのピアサポーターに「相談」するというのは現代の大学生にはハードルが高いことかもしれない。実際、「相談室型」のピアサポート活動を行う場合、来談者が少ないことによりピアサポーターのモチベーション維持が難しいことが指摘されている（鈴木，2020）。

それでは、ピアサポート活動は学生支援としてはそれほど有効ではないのかと言うとそうではなく、多様な学生の中でどのような層の学生にはピアサポート活動が意味を持つのかを考える必要があるだろう。学生相談機関は、個別相談に訪れる学生のみを支援の対象とするのではなく、全ての学生をその支援の対象としている。筆者が会ったような孤立学生が、いきなりピアサポート活動を利用して相談・交流することは難しいかもしれないが、もう少し孤立傾向が低く、対人交流に興味関心を持っている層の学生にとっては、ピアサポート活動という枠組みでの支援が有効な場合もあるだろう。また、孤立学生であっても個別相談を続ける中で少しずつ変化が生じ、他者への興味関心が出てくる時期には、ピアサポート活動が有効に働くかもしれない。さらに、どの大学でもよく行われている新生に対するピアサポート活動のように、初期適応を支援することができれば、その後にはそれほどの支援を必要としない学生もいるだろう。つまり、学生生活サイクルや学生の多様性・多層性を前提として、ピアサポート活動という学生支援が有効なタイミングも考慮に入れながら、学生支援としてのピアサポート活動が有効に機能するのはどのような条件なのかを検討する必要があるだろう。

3.3 現代の大学生へのピアサポート活動の心理学的意義

ここで、コロナ禍が何をもたらしたのかについて考えた上で、改めて現代の大学生へのピアサポート活動の心理学的意義について検討したい。高石（2022）や田中（2023）が述べているように、コロナ禍以前から人はオンラインによって容易につながれるようになったが、直に「対面」しなくなりつつあり、コロナ禍はそのような流れを加速させたただけだとも考えられる。大学生で見れば、大学入学前から「#春から〇〇大」というハッシュタグを通してSNSで知り合い、顔も分からないままの「交流」がオンラインのテキストメッセージを中心に始まる。インターネットもSNSもなかった時代のように、顔を合わせて「今ここで」初めて出会い始まる関係ではなく、オンラインを介して既に関係が始まっていることが示すように、入学後においても、オンラインでの繋がり・関係を抜きに現在の大学生活は考えられない。一方で、孤立している学生の場合、インターネット・SNS上の情報が全てであり、誰かと「対面」して出会うことはほぼない。また、現在の様々なサイト・SNSでは、「あなたにおすすめ」といった形で、過去に閲覧したり購入したものの

関連した情報を自動的にピックアップし提示してくれるため、自分の好むものをより好むようになり、自身の価値観と合わないものや興味のない異質なものに会うことが難しくなっている。このことを京都大学という場について考えてみると、多様な学生・教職員が所属しており、自身とは異質なものと出会う機会が多くあるはずの環境にもかかわらず、身近な仲間内だけの関係で閉じてしまったり、オンラインだけの情報に接して異質なものに触れにくい状況に陥るのは、大きな機会損失だろう。そして、コロナ禍はそのような閉じた世界をより加速させていったのだろう。

コロナ禍を経て、人が「対面」しない状況、大学生で言うならば同年代の学生同士が心理学的な意味で「出会う」ことが難しくなっている状況においては、従来からの大学の教職員が提供する学生支援だけでは不十分なのではないだろうか。もちろん、教職員による学生支援により、異質なものと出会い成長の機会となることの意義を否定する必要はないが、同年代の学生と関わることでしか得られない経験もあるだろう。ここで、「心理学的な意味で出会う」というのは、ただ物理的な意味での出合いを意味するのではなく、他者と出会うことを通して、良くも悪くも意外な形で自身について知り、考え、時には苦悩が始まり、場合によっては一体感が生じるなど、個々人の人格的な成長を促すようなものを指す。土井（2014a）は、キャラを演じ合う今日の人間関係は、予定調和を崩さないように努力が払われるため、相手の意外な反応に出会うこともなく、そのため本当の自分の姿と出会うこともできないと指摘しているが、「対面」することで初めてその予定調和を突き崩すことが可能な場合もあるだろう。その意味では、同じ学生の立場から支援を行うことが特徴とされるピアサポートは、ただ単純に学生支援のバリエーションを増やすという意味だけではなく、学生に取っては心理学的にも重要な意義があると思われる。つまり、ピアサポート活動は学生という「属性」が同じだから有効な支援になるという側面はありつつも、それが心理学的な意味を持つのは、「同じ学生」であるが、しかし同時に「異なる」という他者性、つまり「同じであることと違っていることの同時性」（田中、2010）²⁾を持つ学生による支援だからなのではないだろうか。学生は「同じであるけれど異なる学生」という他者に出会うことを通して自己に出会い、成長することができると考えられる。同じ学生の立場だからこそ、共感できる・分かり合えることにより支援が円滑に進められるという、ピアサポート活動の肯定的側面にのみ注目されることが多いが、むしろ同じ学生の立場だからこそ、他者と自身の違いが際立つ、求めていた支援が得られない（分かってもらえない・期待していたものと異なり失望する）、他者と比較して劣等感を感じるなどの否定的側面を体験する状況もピアサポート活動は孕んでいる。そのような体験をどう消化し乗り越えるか（乗り越えられないと自覚するか）にこそ心理学的意義や人格の成長の機会があるのではないだろうか。もちろん、この場合の「出会うこと」は、ただ対面すれば良いというわけではない。学生同士の繋がり・出会いが重要だからと言って、土井（2014b）が指摘しているようにオンライン・SNSを放棄して、旧時代的な生活に回帰すれば良いということでもない。もはや止めようがないデジタルツールの進化とそれに伴うライフスタイルの変化も受け入れた上で、むしろそれらを活用することこそが求められていると言える。土井（2014b）は「ネットによって狭小化し、濃密になってしまった人間関係だからこそ、逆にそのネットを活用することで、閉じられた関係を外部へと開き、その重さから彼らを解放していく工夫が必要」と述べているが、現代の大学生へのピアサポート活動もこれと同じことが言えるだろう。つまり、コロナ禍を経てより対面せずに狭小化していく学生の体験世界を広げていき、「同じだけれど違う」という、多様な学生との出会いの場を、支援を受ける学生にもピアサポーター学生にも提供することに、ピアサポート活動の心理学的意義があるのだろう。もちろん、これはピアサポート活動だけに限ったものではなく、学生同士が様々な関わりをすることで生じるものであるが、コロナ禍の最中に様々な課外活動が制限され、学生の繋がり之母体となるサークル活動などがダメージを受けた今だからこそ、改めてピアサポート活動という形で大学が公的に、大学生同士の関わり・出会いを後押しすることも必要なのではないだろうか。

4 ピアサポーターの養成

4.1 養成の方法——サポーターの養成を越えて

それでは、ピアサポート活動を実践するピアサポーターをどのように養成するのが望ましいのだろうか？既に他大学で行われているピアサポーターの養成の方法は大きく3つあり、①ピアサポート活動について学ぶ正課の授業を開講し、その受講終了者をピアサポーターとするもの、②ピアサポーターとして活動することを希望する学生を募り、研修を受講してもらいピアサポーターとして認定するもの、③この両者を組み合わせたもの、となるだろう。京都大学におけるピアサポート導入については、①で開始し、その後授業以外の養成ルートを設定することで結果的に③を採用することとした。

具体的には、2023年度前期に全学共通科目の少人数科目群 ILAS セミナーで「ピアサポート入門」を開講した。ILAS セミナーは「各学部・研究科・研究所・センター等の教員がフェイス・トゥ・フェイスの親密な人間関係の中で、様々な形態の授業を行うもので、学部新入生を主な対象に、学問の楽しさや意義をみなさんに実感してもらうことによる勉学生活への導入を目標として開講されて」いるものである（京都大学国際高等教育院，2024）。基本的には前期に開講され、上述したように1回生が受講の中心になっている。京都大学での学生生活がある程度過ごし、様々な問題点や課題を感じた学生がピアサポート活動について学び、ピアサポーターになることが望ましいと考え、当初は講義科目として後期に全学年を対象とした開講を検討したが、全学共通科目を所掌する国際高等教育院での科目審査に間に合わなかったため、2023年度は ILAS セミナーで開講することとした。なお、2024年度からは後期に講義科目として全学年を対象に「ピアサポート入門」を開講することになっている。

ILAS セミナーという形で、履修者数などに制限があるものの全学共通科目としてピアサポート活動に関する講義を開講する意義についてここで述べておきたい。ピアサポーターの養成だけを考えれば、ピアサポート活動に強く興味関心を示す学生のみを対象として、上記②の形で研修を実施すれば十分であろう。①の形でピアサポート活動に関する講義を提供しても、受講者が必ずしもピアサポーターとして活動を希望するとは限らない。また、履修を終えるまでピアサポーターとして活動できないことは、ピアサポーターの養成のスピードを鈍らせる。それでも筆者はピアサポート活動に関する授業を開講することで、たとえ受講者（単位取得者）がピアサポーターとして活動しなかったとしても、授業を通して身につけるピアサポート活動に関する知識や、ピアサポート活動を行う上で必要となるコミュニケーション能力・傾聴スキルなどは、その後の受講者の学生生活や社会人生活に役立つことが考えられる。また、ピアサポート活動について学んだ学生が少しでも学内に増えていくことで、京都大学内に支え合いのピアサポートマインドを少しずつ涵養していくことができるのではないだろうか。さらに言えば、ピアサポート活動に関する授業を受講しなかったとしても、履修登録の段階でシラバスを見る学生がいるだけでも、京都大学内でピアサポート活動が行われていることを知る機会になるだろう。これは、全学生を対象として、ピアサポートマインドを涵養したいと考えている部門が京都大学の中にはあるというメッセージを発信することにも繋がるため、ピアサポート活動に関する授業を提供することには重要な意味があると考えられる。

しかし、授業でのみピアサポーターを養成する場合、年間を通してピアサポーターになりたいという学生の希望に応えられないため、授業とは別に研修を受講してピアサポーターになるルートも採用することとした。具体的にはオンデマンドの動画を視聴した上で課されたレポートを提出することと、対面でのグループワークの研修を受講し、最後に筆者を含むピアサポート活動を担当する教職員と面談を経てピアサポーターとして認定することとした。

4.2 何を学び、身に着けるのか——学生支援という概念を解放し、「遊ぶ」こと

2023年度のILASセミナー「ピアサポート入門」のシラバスを図1に示した。

ピアサポーターを養成する際に、何を学び身に着けてもらうのかについてはこれまで多くの指摘がある（松下ら，2020・山田，2020など）。ピアサポート活動に関する概略的な知識の習得，実際にピアサポート活動を行う際に必要となる心構え・態度・倫理意識，コミュニケーションスキルの獲得，問題解決（対立解消）

科目ナンバリング		U-LAS70 10001 SJ50		ILASセミナー：ピアサポート入門		古川 裕之	
授業科目名 <英語>		ILAS Seminar: Introduction to Peer Support		学生総合支援機構 講師		古川 裕之	
群	少人数群	単位数	2単位	週コマ数	1コマ	授業形態	ゼミ
開講年度・開講期	2023・前期	受講定員 (1回生定員)	25 (10)人	配当学年	主として1回生	対象学生	全学向
曜時限	金5	教室	共北11	使用言語			日本語
キーワード ピアサポート / 学生支援 / コミュニケーション							
【授業の概要・目的】 学生どうしで支え助け合う「ピアサポート」の理念を学び、実際にピアサポート活動ができるようになることがこの授業の目的です。困ったことがあった際に利用できる京都大学内にあるサポート資源について理解し、また実際に自分たちが相互に助けあうために必要なコミュニケーションスキルを身に付けます。そして、自分たちでピアサポート活動を実践するためのプランニングする力を養います。							
【到達目標】 ・ピアサポートの理念について理解する ・京都大学内のサポート資源について理解する ・サポートの際に必要なコミュニケーションスキルを体験的に学ぶ ・サポートの際に必要な心構え・態度・倫理的な配慮について理解する ・グループでの活動などに主体的に、また協調して参加することができる							
【授業計画と内容】 以下の授業計画・内容は、受講者の理解度やゲストスピーカーの都合などにより、適宜変更する場合があります。 第1回：オリエンテーション、自己紹介 第2回：アイスブレイク（コミュニケーションのウォーミングアップ） 第3回：コミュニケーションスキル向上のためのワーク①（傾聴） 第4回：コミュニケーションスキル向上のためのワーク②（アサーション） 第5回：コミュニケーションスキル向上のためのワーク③（問題解決） 第6回：大学の中のサポート資源について知る①（学生相談・ハラスメント） 第7回：大学の中のサポート資源について知る②（障害学生支援・就職支援） 第8回：大学の中のサポート資源について知る③（留学生支援・メンタルヘルス） 第9回：大学生の心理的発達課題、相談を受ける際の守秘義務と倫理 第10回：他大学のピアサポート実践について知る 第11回：ピアサポートプランニング①（京都大学で必要だと考えるピアサポート活動について考え、具体的な活動を計画する） 第12回：ピアサポートプランニング② 第13回：ピアサポートプランの発表 第14回：全体の振り返り 第15回：フィードバック							
ILASセミナー：ピアサポート入門(2)							
【履修要件】 京都大学の中で、今後ピアサポート活動を実施したいと考えている人の履修を歓迎します。また、授業内ではグループワークやディスカッションなどを多く行いますので、積極的に関与することが求められます。欠席すると、その後の授業参加に支障が出る可能性がありますので、やむをえない場合を除き、毎回の出席と参加が必要となります。							
【成績評価の方法・観点】 平常点70：毎回の授業後に提出する小レポート、グループワークへの貢献度、ピアサポートプランの作成と発表 期末レポート30 この科目の「履修要件」にもある通り、授業を欠席するとその後の授業参加に支障が出ますので、やむをえない場合を除き、3回以上授業を欠席した場合には不合格とします。							
【教科書】 使用しない							
【参考書等】 授業中に紹介する							
【授業外学習（予習・復習）等】 予習は不要ですが、毎回の授業を振り返り小レポートを授業時間外に作成して提出してもらいます。また、第11～13回の授業にかけては、グループメンバーで授業時間外にも発表準備をする可能性があります。							
【その他（オフィスアワー等）】 今後、学生総合支援機構学生相談センターが京都大学の中でピアサポート活動を実施する場合、活動に参加するには本授業を受講していることが望ましい（詳細は未定）。							

図1. 2023年度 ILAS セミナー「ピアサポート入門」シラバス

の方法、自校を含めたピアサポート活動の実際例を踏まえた上での具体的なピアサポート活動の計画などが具体的な内容として挙げられる。その中でも特に傾聴スキルが強調されている。「相談室型」のピアサポート活動を行うかどうかは別として、支援対象となる学生と接する時だけでなく、同じピアサポーター同士で話し合う場においても傾聴スキルを身に付けておくことは意味があるだろう。傾聴する力は、ピアサポート活動という文脈だけでなく、他者を理解し多様性を尊重する際の基礎にもなるだろう。ただし、高野（2020）が述べているように、ピアサポート活動でアウトリーチ型の支援を行う場合には、「相手の話を受容的に聴くカウンセリング的なコミュニケーションとは異なるスキルが必要」であり、「支援を必要とする人がいるところに入って行き、積極的に声をかけ、支援を提供するためには、外向的で積極的なコミュニケーションが求め」られる。そのような意味では、「ピア・サポーターの養成研修でよく用いられるような、受容的な話の聴き方の研修だけでは不十分」という指摘は重要である。傾聴は基本でありながらも、ニーズを把握していけるようなアウトリーチする力もピアサポーターには求められるだろう。

また、そもそも学生は、学内で利用可能な学生支援に関するリソースを知らないことが多い（入学時などに情報としては提供されていても、情報が膨大なため埋もれてしまう）。相談室型の活動を実施してもしなくても、学内の学生支援リソースを知り身近なものとしてもらうことは、受講学生にとっても意味があると考えられる。さらに、学生支援担当教職員から学生支援の現場で実際に感じていること、ピアサポート活動に期待することを聞くことができれば、具体的なピアサポート活動の内容をイメージしやすくなると考えられる。そこで、2023年度 ILAS セミナー「ピアサポート入門」では、学内の学生支援担当者をゲストスピーカーとして招いて講演いただくこととした（学生相談とハラスメントに関する話を中川純子氏に、障害学生支援に関する話を村田淳氏に、就職支援に関する話を鈴木裕子氏に、留学生支援とメンタルヘルスに関する話を梁瀬まや氏にお願いした）。

なお、京都大学においてはピアサポート活動が実施されていないため、具体的にどのような活動を行っているのか、他大学の例を知ることが、今後京大内でピアサポート活動を実践する際に役立つと考え、複数大学でピアサポート活動に携わってきた埼玉工業大学の田中崇恵氏に、他大学でのピアサポート活動の実際をお話いただいた。その講演の際に筆者が得た示唆として「学生支援」を狭義の意味に閉じ込めてしまわないことが重要だということが挙げられる。学生の自主的な活動（課外活動などの学生のみで実施するもの）ではなく、ピアサポート活動をあくまで学生支援の一環として行う場合、支援対象者の学生に対する倫理的配慮など、責任が伴う。また、「支援」ということで何か役に立つようなことをしなければならぬと考え始めると堅苦しくなり、「毒にも薬にもならない」ような、あまり意味がない支援しかできなくなってしまう可能性もあるだろう。そのような「ありきたり」な支援は、提供するピアサポーター側にとっても、支援を受ける学生にとっても実りあるものになるとは考え難い。むしろ、一度「学生支援」という概念から解放され、実現できるかどうかは脇に置いた上で、純粋に学生が必要としているものは何か、楽しめるものは何かといった素朴さに立ち返り、その上で改めて「学生支援」とは何だろうかと考え直す機会を持つことが、これからピアサポート活動を始める上で必要だろう。

このことを別の角度から述べると、「遊ぶこと」がピアサポートには求められているのではないだろうか。皆本（2014）は心理臨床における第三項としての「遊ぶこと」について検討する中で、「第三項として捉えた時、精神療法は、患者と治療者という対から生じる領域であるが、両者にとっても未知である、全く新しいものとして到来すると考えられる」と述べている。心理臨床・精神療法という文脈を大学・学生支援に敷衍しても良いならば、また、ピアサポートを大学（学生支援）と大学生の間の第三項として捉えるならば、ピアサポートは両者にとって未知の全く新しいものを生み出す可能性を秘めていると言える。また、皆本は Winnicott（1971/1979）が精神療法における遊びについて述べていることとして、「遊ぶことが起こりえな

い場合に、治療者のなすべき作業は、患者を遊べない状態から遊べる状態へ導くように努力することである」という一節を引用しているが、これをピアサポートに置き換えるならば、「遊ぶことが起こりえない場合に、ピアサポートのなすべき作業は、大学（大学生）を遊べない状態から遊べる状態へ導くように努力すること」により、「全く新しいものの到来」を促すことだと言えるだろう。

もちろん、ただ遊び、楽しいことを実施すれば良いわけではないし、実施には責任が伴うものの、ピアサポート活動が教職員による学生支援の縮小版や下請けのようになってしまうことは望ましくないだろう。教職員が提供する学生支援と重なる部分はありながらも、それにとらわれることなく自由に発想し実行していくことが、京都大学に新たな価値をもたらすきっかけになるだろう。そのような自由に「遊ぶこと」が、ピアサポートを京都大学に根付かせていくためには必要なことだと筆者は考えている。

5 おわりに

本稿では、京都大学における全学の学生相談機関でピアサポート活動を導入する際に検討した諸点について述べた。ピアサポート活動は、京都大学における学生支援として、新たな可能性を持っていると考えられるが、あくまで活動の主体はピアサポーター学生にある。教職員側から活動を押し付けるわけにはいかない。彼らの活動を程よくバックアップし、ピアサポートマインドが京都大学全体に広まっていくよう、根気強い取り組みが求められる。多様な学生が集う京都大学において、ピアサポートマインドを持った学生が増えることは、他者の尊重・多様性理解を推し進める基盤にもなりうると筆者は考えている。ピアサポート活動の具体的な内容、またサポーター養成や継続研修の課題など、様々に検討すべき点が多いが、それらは次年度以降に報告したい。

[注]

- 1) 引用文献中の表記が「ピア・サポート」「ピア・サポーター」となっている場合はそのまま表記するが、本稿では「ピアサポート」「ピアサポーター」と「・」なしで表記する。
- 2) 田中（2010）は「大人の発達障害への心理療法的アプローチ」に関してこの言及をしているが、「大人の発達障害」に限らず、広く心理療法および人間の成長に関して妥当なことだと考え、引用している。

[文献]

- 土井隆義. つながりを煽られる子どもたち ネット依存といじめ問題を考える. 岩波書店, 2014a.
- 土井隆義. LINE で閉じる友だちの世界～ネットで狭くなった人間関係～. 教育オピニオン. 明治図書オンライン「教育 Zine」. 2014b. <https://www.meijitoshosha.co.jp/eduzine/opinion/?id=20140176> (2024年8月27日取得)
- 古川裕之. 京都大学における学生相談のさらなる充実に向けた試論. 京都大学学生総合支援機構紀要. 2022, 1, 71-82.
- 早坂浩志. ピア・サポートへの取り組み. 学生相談ハンドブック. 日本学生相談学会50周年記念誌編集委員会（編）. 学苑社, 2010, 196-201.
- 金山健一. 大学生のピアサポート活動の効果測定——要支援大学生の1年間のピアサポート活動を中心に——. 立命館経済学. 2023, 71（6）, 58-68.
- 京都大学国際高等教育院. 全学共通科目履修の手引き（令和6（2024）年度版）. 2024. <https://www.z.kyoto-u.ac.jp/pdf/link/link0978.pdf?1711967459> (2024年8月31日取得)
- 松田優一. 大学におけるピア・サポート拡大の政策過程——学生支援 GP に着目して——. 政策創造研究. 2021,

15, 127-152.

- 松下健・松田優一. 大学でのピア・サポート活動で求められる訓練. 大学でのピア・サポート入門 始める・進める・深める. 春日井敏之・増田梨花・池雅之 (編). ほんの森出版, 2020, 26-33.
- 皆本麻実. 心理臨床における「遊ぶこと」に関する一考察——第三項という観点から——. 京都大学大学院教育学研究科紀要. 2014, 60, 261-271.
- 文部科学省. 大学における学生生活の充実方策について (報告) ——学生の立場に立った大学づくりを目指して——. 2000. https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chousa/koutou/012/toushin/000601.htm?a8=s7Jmh7cw.IMmntnJQWaLb5b23bw16MD3VSaMuc4tCquKw.IJ79bL7qbLNo41QYQXMFuHbe5J2F7Jmgs00000022012001 (2024年8月31日取得)
- 日本学生支援機構. 学生支援の現代的展開——平成22年度学生支援取組状況調査より——. 2011, 63-78. https://www.jasso.go.jp/statistics/gakusei_torikumi/2010/_icsFiles/afieldfile/2021/03/12/h22torikumi_houkoku.pdf (2024年8月31日取得)
- 日本学生支援機構. 大学等における学生支援の取組状況に関する調査 (令和3年度 (2021年度)) 結果報告. 2023, https://www.jasso.go.jp/statistics/gakusei_torikumi/_icsFiles/afieldfile/2022/12/20/1_kekka_1.pdf (2024年8月20日取得)
- 日本学生支援機構. コロナ禍における学生同士の交流に関する取組事例集【増補版】. 2023, https://www.jasso.go.jp/statistics/gakusei_torikumi/_icsFiles/afieldfile/2023/01/16/202301_kouryujirei.pdf (2024年8月27日取得)
- 日本学生相談学会. 学生の自殺防止のためのガイドライン. 2014. 一般社団法人日本学生相談学会. <https://www.gakuseisodan.com/wp-content/uploads/public/Guideline-20140425.pdf> (2024年8月27日取得)
- 鈴木英一郎. ピアサポート. 学生相談ハンドブック 新訂版. 日本学生相談学会 (編). 学苑社, 2020, 172-178.
- 高田純・石田貴洋・三浦寿秀・内野悌司・兒玉憲一. ピアサポート活動は社会でどのように活かされているか——A 大学ピアサポーター卒業生に対する調査から——. 総合保健科学. 2022, 37, 33-39.
- 高石恭子. コロナ禍が加速した学生の体験様式の変容について——こころの「密」の喪失と回復という観点からの一考察——. 甲南大学学生相談室紀要. 2022, 29, 40-52.
- 高野明. 学生の主体性を活かしたピア・サポート活動 大学コミュニティへ働きかけるアウトリーチ中心の活動. 大学でのピア・サポート入門 始める・進める・深める. 春日井敏之・増田梨花・池雅之 (編). ほんの森出版, 2020, 52-55.
- 田中康裕. 大人の発達障害への心理療法的アプローチ——発達障害は張り子の羊の夢を見るか? 発達障害への心理療法的アプローチ. 河合俊雄 (編). 創元社. 2010, 80-104.
- 田中康裕. ポスト・コロナと心理療法. 京都大学大学院教育学研究科附属臨床教育実践研究センター紀要. 2023, 26, 1-2.
- 植田峰悠・清水馨・河合輝久・細野正人・大島紀人・高野明. 大学生ピアサポーターの活動継続促進要因に関する探索的検討. 学生相談研究. 2018, 39, 130-142.
- 内野悌司・石田貴洋・三浦寿秀・栗田智未・兒玉憲一. 広島大学ピア・サポート・ルームの活動評価についての考察——2011年度活動の Empowerment Evaluation を通して——. 総合保健科学. 2013, 29, 13-23.
- Winnicott, D. W. *Playing and Reality*. Tavistock Publications Ltd, London.1971. 橋本雅雄 (訳). 遊ぶことと現実. 岩崎学術出版社, 1979.
- 山田日吉. 全学共通科目「共に支え, 学び合うピア・サポート」岐阜大学における導入と展開. 大学でのピア・サポート入門 始める・進める・深める. 春日井敏之・増田梨花・池雅之 (編). ほんの森出版, 2020, 40-43.

【謝辞】

ピアサポーターとして活動する学生の皆さまに心よりお礼申し上げます。2023年度に開講したILASセミナー「ピアサポート入門」にてゲストスピーカーとしてお話しいただきました皆さまにお礼申し上げます。また、ピアサポート活動を筆者と共に担当する学生総合支援機構学生相談部門特定専門業務職員の神代末人さん・三枚奈穂さんにもお礼申し上げます。